

イエメンに及ぶアメリカの地獄

【訳者注】わかりやすく簡潔なイエメン情勢の説明で、ほとんどすべての行に傍点を打ちたくなる。我々に世界情勢がよく呑み込めないのは、理由がある。「混沌や矛盾が意味をなすのは、アメリカの対外政策の真の性格が理解されたときだけである。」「アメリカの目標は決して善意によるものではないから、その政策は、恐ろしい決定を次から次へふらふら移り、人間の苦しみだけが唯一の共通項である。」メディアはこのような説明をするどころか、隠してわからなくしている。なかんずく、“現在のすべての紛争の父”と言われる9・11のウソを、いつまでも糞のように包み続けるのは、我々をアメリカの犯罪の共犯者にする意志と受け取れる。日米安保条約があるから、我々はアメリカの暗部を知ってはならない、知らなくてよい、という理屈は成り立たない。

By Margaret Kimberley

April 2, 2015

アメリカの生み出した殺戮と破壊の嵐は、イラク、リビア、シリア、ソマリア、そしてイエメンの社会をずたずたにしたが、ほとんどのアメリカ人は自分たちが咎められるいわれはないと考えている。「人民、企業メディア、そして政治体制のすべてが、自分たちの政府は他国の問題に介入する権利があり、その主張は常に正しく道徳的だと受け止めている。」彼らは、帝国主義的な死の機械のゾンビ化された歯車のように振る舞っている。

アメリカは、イエメンの Al Anad 空軍基地 を、無人機攻撃を企てる基地として使っていたが、それは2009年以来、ほぼ1,000人を殺している。こうした犯罪は、テロとの戦いという名に隠れて行われてきたが、今この同じ場所が、米政府とその同盟国サウジアラビアが、カルマの正義を受ける場所になっている。アメリカの特殊空軍部隊は、アンサル・アラー反乱軍(別名 Houthi——フーシ派)によって制圧される前に、アルアナド基地を逃げ出した。

<http://www.wsws.org/en/articles/2015/03/28/pers-m28.html>

サウジアラビアが Houthi の陣地を空爆し、エジプトの助けを借りて、今にも地上侵略を始めようとしていることは事実である。サウジもエジプトも、アメリカの寄生国家で、ワシントンからのゴーサインがなければ、こんな行動は考えないだろう。

イエメンと、それを内戦に追い込んだ浮動する国際同盟の話は、やや込み入っている。

Houthi 反乱軍は、アメリカ軍と、サウジの支援を得ていま逃亡中の Hadi 大統領を追い出した。彼の前任者 Ali Abdulla Saleh は、一時、サウジのお気に入りだったが、現在は Houthi の進攻を手引きしている。細かい点はややこしく掴みにくい、単純な一つの事実がある。アメリカの帝国主義と、この地方で始まったテロとの戦争が、究極的に間違っており、国家を次々と破壊し続けているのである。

アメリカは覇権を維持し続けようとして、野蛮な力に頼り、その真似をする他者を支援している。その結果は、イラク、リビア、シリア、ソマリア、そしてイエメンでの死体の山なのだが、こうした犯罪につながる意思決定は、アメリカの政策に特有の病気である。

バラク・オバマと彼のオーヴァル・オフィス（大統領執務室）の前任者たちが、中東をめっちゃくちゃにしたと言うのは、「控えめな言い方」の定義そのものである。アメリカの目標は決して善意によるものではないから、その政策は、恐ろしい決定を次から次へとふらふら移り、人間の苦しみだけが唯一の共通項である。

ワシントンは、リビアのジハーディストを使って、カダフィ政府を転覆させたが、その結果は、同じグループに米大使を殺させることになった。現在、アメリカは、ほんの数年前にそこで支援していた同じ人々と戦っている。アメリカはシリアでは、アルカーイダや ISIS と共同して戦うが、イラクでは、この同じ 2 つのグループを相手に戦っている。ワシントンはエジプトでは、ムバラクの追放を究極的に受け入れることにしたが、しかし今では、別のリーダーによる独裁体制の復活を支持している。アメリカはスーダンの大統領を戦争犯罪者と呼ぶが、今はイエメンで同じ側に立って戦っている。帝国主義が意図されているときには、出来事は決して予言されたようには起らない。

混沌や矛盾が意味をなすのは、アメリカの対外政策の真の性格が理解されたときだけである。入れ替わる同盟関係や、一見して不思議な野合 (bedfellows) は、昔からある Manifest Destiny (明白な征服の宿命) という教義の一部である。この言葉は、アメリカ合衆国はその版図を好きなだけ、どこまでも拡大する権利をもつ、と主張している。それは元々、19 世紀の北米侵略について言うものだったが、その背後にある考え方は、いまだに、この国の意識の一部になっている。

大多数のアメリカ人は、イエメンやサウジアラビアについて、ほとんど何も知らないが、彼らの政府のことを話すときには、めでたくも、自分たちを一人称複数で表現する——「シリア/イラク/イエメン/リビアについて、“我々”はどうしたらいいのだろうか？」などと。

大統領は次々と入れ替わるのだが、人民、企業メディア、それに政治体制はすべて、自分た

ちの政府は、他国の問題にくちばしを入れる権利があり、その主張はいつも正しく道徳的だと、当然のように考えている。バラク・オバマが、シリアの大統領を追い出したり、ウクライナの大統領を支持したりすることに、関わってよいものかどうか、疑問に思うアメリカ人はほんのわずかしかない。

愚かな決定の例はいくらでもある。レーガン大統領はイランと取引をしたが、次にイラクに対し、イランへの攻撃をそそのかした。後に、アメリカは2つの別々の戦争でイラクを攻撃した。この国の破壊が残忍な宗派間戦争へとつながり、イエメンの Houthis の台頭をもたらした。

<http://www.theguardian.com/world/2015/mar/26/iran-saudi-proxy-war-yemen-crisis>

イエメンは今、凶暴になった帝国主義の中心になっている。サウジは、シーア派の Houthis が、彼らのライバルのイランに支援されることを恐れている。そのイランを今、アメリカは核エネルギー交渉で合意させようとしている。したがってサウジアラビアは、イスラエルの側に立って、どんな合意も無効にさせようとしている。すべての強盗どもの間に、いまだ信義というものはない。

ワシントンがどんな政策決定を選んだとしても、それは意図しなかった結果と、さらなる暴力を生み出すであろう。それがエスカレートするたびに、より大きな危険をもたらし、アメリカは何百万の人々に破壊をもたらす点で、今のところ競争者をもたない。暴力と混沌は、ある目的のための手段であるだけでなく、それ自体が目的になっている。これがアメリカのやり方の宿命である。

(マーガレット・キンバリーの *Freedom Rider* コラム記事は、毎週 *BAR* に出ており、別の場所でも広くリプリントされている。彼女は頻繁にアップデートされるブログも経営している。<http://freedomrider.blogspot.com/> ミズ・キンバリーはニューヨーク市在住。)